

# 図書館だより

目次	
国際子ども図書館を訪ねて 「今、学生にすすめる本」特集 (その11)	—出渕 敬子 1
—馬岡 清人	住澤 博紀 2
マイケル・ガーデナ	吉良 芳恵
遠藤 知巳	増田 幸弘 3
斎藤 広信	小館香椎子
中馬邦著『成瀬仁蔵 (人物叢書231巻)』刊行によせて	—真橋美智子 4
100周年記念出版『日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡』 『年表・日本女子大学の100年』の紹介—成瀬記念館	5
展示「わたしたちの創る日本文学の教科書」	—小川 靖彦 6
日本女子大学図書館友の会第37回 (平成14年度) 総会開催される	7
図書館からのお知らせ (目白・西生田)	8



## 国際子ども図書館を訪ねて

出渕 敬子

2002年5月5日、国会図書館の支部として国際子ども図書館が全面開館された。日本では初めての国立の児童書専門図書館である。さっそく訪ねてみると、連休で賑わう上野公園の奥まった一角に、緑の木立ちに囲まれて、明治期の洋風建築がどっしりと立っていた。ルネッサンス様式の旧帝國図書館を修復したというだけあって、およそ100年前に建てられた3階建ての建物にガラスのテラスやロビーを巧みに配し、古さとモダンな感じが見事に調和している。内部に入ると、天井が高く、部屋の入り口や壁の一部には昔の木製の内装が残されて重厚な雰囲気醸し出し、広い窓の外にはヒマラヤ杉が繁り、テラスへ出ると、外壁のレリーフが間近に見られるようになっている。このような図書館に足を踏み入れただけで、別世界に来たような落ち着いた気分になれて嬉しい。

さて肝心の図書館の中身はどうかといえば、これがまたよく工夫されている。この図書館の特徴は、子どものみでなく、おとなをも対象としていること、日本のものばかりでなく、世界の子どもの本と情報を集めようという国際的な視野をもっていることだろう。それゆえ子どものための開架式閲覧室、読み聞かせのための「おはなしのへや」、「世界を知るへや」、パソコンで絵本が見られる「メディアふれ合いコーナー」のほかに、児童書に関する展示室「本のミュージアム」や、世界各地の児童書と関連資料が集められている二つの資料室がある。

現在、開館記念展示として、「不思議の国の仲間たち—昔話から物語へ—」と題した展示が行われている。江戸期の「一寸法師」や「桃太郎」の絵草紙から始まって20世紀の「風の又三郎」や「指輪物語」に至るまで、世界各国の昔話や児童書150点余りが展示され、それらについて優れた構造分析が記され、圧巻である。昔から洋の東西を問わず児童書には挿絵が重要な役割を果たしていたことが改めて見てとられる。(同じことは、これも先ごろ開かれたA.A.ミルの生誕120周年記念展でも感じたことだ。本学の卒業生で訳者の石井桃子氏も言っているように、「クマのプーさん」の魅力の源泉の半分はE.H.シェパードの挿絵にあることは間違いない。)

昔話にも、児童文学として創作された物語にも、国や地域を越えて共通するいくつかのテーマや結末が見られるという。たとえば、主人公がある難題や試練を与えられ、それを克服する話、長者になり結婚する結末、あるいは旅を終えて成長した主人公がふるさとへ帰還する結末など。このような事実は、人間がなぜ物語を伝承し、また創作するかという根源的な問いに結びつくと考えられる。本を読む人が減ってきたといわれる昨今だが、この展示で見る限り、物語を創造し、互いに語り、読むという人間の古くからの営みはこれからも続いて行くだろうと確信した。

## 「今、学生にすすめる本」特集（その11）

### ■馬岡清人（児童学科教授）

ドナ・ウィリアムズ著 河野万里子訳 『自閉症だったわたしへ』 1993年 『こころという名の贈り物』 1996年 『ドナの結婚』 2002年 新潮社

自閉性障害は対人関係、コミュニケーション、興味や活動の幅の3領域の質的異常を主症状として幼児期に始まる広範性発達障害の一つである。重い知的障害を伴う人もいるが、この3冊の著者のドナ・ウィリアムズのように知的機能が部分的に非常に高い「高機能自閉症」と呼ばれる人もいる。『自閉症だったわたしへ』では主にドナ自身の成育歴が語られ、『こころという名の贈り物』ではドナが自閉性障害の混乱から抜け出して成長する経過が述べられる。『ドナの結婚』ではドナとイアン（ポール）が互いに自閉症の「防衛」を脱ぎ捨て、「人」として関わり合う過程が描かれる。自閉性障害の特徴はあるが、ひとりの人としての自分を発見し、「世の中」との関わりを作りあげていくドナの物語は、自分探しの途上にある学生諸姉の共感を得られるのではないかと考える。また障害者と健常者が共に生きるノーマライゼーションの考え方にも新しい視点を提供する。

### ■住澤博紀（家政経済学科教授）

カレル・ヴァン・ウォルフレン著 『日本権力構造の謎』 ハヤカワ文庫 上下 1994

著者は滞日年数が長いオランダのジャーナリストであり、本書は1989年に英語で出版され、日本語版が1990年に出された。ちょうどバブル経済の頂点であり、21世紀が日本の世紀であると広く信じられていた時代であった。当時、多くの「日本異質論」や「ジャパン・バッシング（日本叩き）」が英語圏から出版され、本書もそうした著作として日本では扱われた。そのころドイツから帰国したばかりの私の目には、この本が日本の研究者やメディアから不当な扱いを受けていることは明らかであった。要するに、この本は、日本のさまざまな領域でのエリートたちに、さらに日本人全体に都合の悪い本であった。2002年の現在では、「日本システムの問題」は認知され、多くの日本人も官僚、政治家、企業家の腐敗や当事者能力の欠如を批判する。しかし残念ながら、その徹底性、体系性において、日本人の著作は現在でもウォルフレンの水準を越えることができない。

### ■マイケル・ガーデナ（英文学科講師）

Yoshino Kosaku, *Cultural nationalism in contemporary Japan* (London: Routledge, 1992)

この書は、吉野氏が後に有名な政治学者となった Anthony Smith の指導のもと、London School of Economics に提出した博士論文を発展させて、1992年に発表したものである。なお、これを著者本人が日本語にまとめなおしたものが、『文化ナショナリズムの社会学』として1997年に出版されている。この著書は、日本文化が独特で世界から切断されたものであると説明されるのはなぜなのか、また、いつからなのか、を問っている。この独特さの「もと」はかなり近年の産物である。別々の「文化」に属する国籍同士が、互いに自らの特徴を繰り返し強調しなければならない状態は、1950年代のいわゆる「国際的な中産階級」が再構築した、表象しやすい「日本」と強い関係がある。著者は、それが自らの「文化」における位置を危ういものにするにもかかわらず、「文化」の所有権を問いに付し、また自らの文化に関する考え方が研究を経て変わっていくことを受け入れている。最高の「留学」の産物である。

### ■吉良芳恵（史学科助教授）

加藤陽子著 『戦争の日本近現代史—征韓論から太平洋戦争まで』 講談社現代新書 2002年

この本は、気鋭の日本近代史家が東京大学で行った講義をまとめたものです。著者は1996年に『徴兵制と近代日本』を著し、軍事史研究に新鮮な風を吹き込みました。今回は新書版ながら、「研究書を水割りしたような概説」ではなく、日本近現代史における「戦争」について鋭い問いを発し、私たちを刺激してやみません。為政者や国民が世界情勢と日本の関係をどのように理解していたのか、またどのような筋道で戦争を受けとめていったのか、という論理を8項目（①「軍備拡張論」の受容、②朝鮮半島の意味、③「利益線論」誕生の経緯、④清国像形成の背景、⑤「文明の敵ロシア」の意味、⑥第一次世界大戦の衝撃、⑦満州事変勃発の原因、⑧日中・太平洋戦争への拡大の意味）にわけて考察し、アジアや世界の中での日本の位相を明らかにしています。歴史を射る目は「なぜ」と問うことなのだ、あらためて思われる本です。

■遠藤 知 巳 (現代社会学科助教授)

フリードリヒ・キッラー著 『グラモフォン・フィルム・タイプライター』 筑摩書房  
1999年 スラヴォイ・ジジェク著 『イデオロギーの崇高な対象』 河出書房新社 2000年

「教養」は崩壊し、「教養」への郷愁すら、たぶんもう実質を喪っている。その傍らでは、もはや意味に繁留されることなく生々流転するさまざまな現象があり、それを追尾する歴大な知が、やはり生起しては消えていく……。私たちはそんな果ての果てにいる。古典が意味を失ったわけではない。だが、この光景から目を逸らすかぎりにおいて、古典を読めという言葉は虚しい。現象と知の浅い連鎖の背後に焦燥感が込められていないわけではなく、しかし連鎖の平面上を滑走しても、意味からは逸れつづける。(無)意味のかかる現在の位相を衝く書物があるとしても、もはや安定した「古典」の群を形成することはあるまい。代表的な何冊かで秩序を構成することもできず、その気のある者が自分なりの「秩序」を模索せねばならないという意味で。何冊かヒントとなるものを。

■増田 幸 弘 (社会福祉学科助教授)

①一番ヶ瀬康子編 『21世紀社会福祉学—一人権・社会福祉・文化』 有斐閣 1995年

②古賀昭典編著 『新版現代公的扶助法論』 法律文化社 1997年

①は本学社会福祉学科の関係者を中心に編まれた論文集。副題に示されるように、論考の対象は多岐にわたる。本書を通じて読者は、(理念と現実の緊張関係の中で行われる)学問的営為としての社会福祉学研究の、広がりや深みを知ることができよう。このような豊かな研究成果を生み出した本学科の学制的伝統は、成瀬仁蔵先生の思想にまで遡ることができるものである(本書357頁以下)。

②は古賀昭典教授(佐賀医科大学名誉教授、元・九州国際大学大学院法学研究科長、前・熊本学園大学大学院社会福祉学研究科長)を中心とするグループで編まれた研究書。公的扶助法研究に関する学界の到達点を示す。人員削減に伴う非自発的失業や、生活苦による自殺が増加している現在、公的扶助の権利論を深化させることは急を要する課題である。本書はその論点を明らかにする。

この2冊に共通するのは、社会問題に対する抑制のきいた冷静な分析である。学部学科を問わず、一読を薦める所以である。

■斎藤 広 信 (文化学科教授)

デカルト著 『方法序説』 岩波文庫 1997年

デカルトがこの哲学書を発表したのは1637年。何をいまさらそんな古い時代の本を、といぶかる向きも多いかもしれない。しかし第一級の古典は時代をこえて生きつづけ、われわれに新鮮な知的刺激を与えてくれる。『方法序説』は「われ思う、ゆえにわれあり」を哲学の第一原理として受け入れるに至ったデカルトの思想的自叙伝である。すべての人が真理を見いだすための方法を求めて書物の中で学ぶが、やがて書物を捨てて旅に出て世間という書物の中で学び、最後に自分の中で学ぶに至る若きデカルト。その「精神の自叙伝」が文庫本でわずか100ページ足らずの中に淡々と語られている。真理を求め、「知を愛する」大学生である今こそこの本を読んでほしい。(ご承知のとおり「哲学」という言葉は「知を愛する」という意味である。)ちなみに目白の大学図書館の玄関正面にはラテン語でVERITAS VIA VITAE(生を通しての真理)の言葉が刻まれている。

■小 舘 香 椎 子 (数物科学科教授)

テオニ・バパス著 秋山仁監訳 『数学は生きている』 東海大学出版会 2000年

学校で、出会った数学は数字や計算の手段あるいは論理的思考方法で無味乾燥でつまらなく、日常生活ではお金の計算以外に必要な学問であると感じていませんか?本書では数学は生活や自然の中にとけ込み、アイデアや想像の基として私達の身の回りで大活躍している様子を182のテーマとして紹介しています。例えば、ウニやロブスターの形には数学のバランス作用である線・点の対称性が見られ、海は数学のアイデアの宝庫であること、亀の甲羅や蜂の巣の六角形は接する面積が最小になる自然現象のバランス点、3又接合(3本の線が1点で交わる構造)の現れであること、などの小さな不思議が沢山クローズアップされています。さらに心臓の鼓動や頭髮の成長が数学的に記述できること、経済・芸術・生物はじめ他分野とのかかわり、パズル・ゲーム、最先端科学まで多種多様で、読み進むうちに驚きが数学への好奇心に変わり読者を十分に満足させてくれるでしょう。

## 中 著『成瀬仁蔵（人物叢書 231巻）』刊行によせて

真橋 美智子



日本女子大学名誉教授中 先生の『成瀬仁蔵（人物叢書 231巻）』（吉川弘文館）が、2002年3月に刊行された。折しも日本女子大学は2001年に創立100周年を迎えたばかりであり、今後の本学のあり方を探り、改めて創立者について学ぶのに、時宜を得た刊行であったといえる。

中 先生は本学史学科に在職中から、成瀬先生研究会のメンバー、後に日本女子大学女子教育研究所の兼任研究員や主事、さらに成瀬記念館主事なども歴任され、成瀬仁蔵研究を一貫して続けてこられ、成瀬研究の第一人者として多くの研究成果を発表されている。こうした先生の成瀬研究の集大成ともいえる本書は、筆者にとってはもちろん、成瀬仁蔵研究、女子高等教育研究に関わる者、本学関係者、さらに卒業生にも待たれていた著書であるといえよう。

本書は吉川弘文館の人物叢書（231巻）として刊行されたことで、成瀬仁蔵という「人物紹介」に重点をおきながら幅広い読者を想定して書かれたものと思われる。本書の構成は、はしがき、第一 生いたち、第二 キリスト教との出会い、第三 アメリカ留学、第四 女子高等教育機関の設立に向かって、第五 日本女子大学校における教育、第六 社会活動とその展開、第七 晩年の思想とその死、成瀬仁蔵の生涯とその魅力、から成り、これに関係略系図、略年譜、参考文献が付されている。つまり成瀬の生涯を追いながら、各時期における活動・思想等が明らかにされている。

「第一 生いたち」では出生から子ども時代、青年時代の成瀬の姿が家族や故郷の自然、社会の状況などを踏まえながら生き生きと描かれている。先行研究を検証しつつ、新たな史資料に基く記述は非常に興味深い。「第二 キリスト教との出会い」では、成瀬の転機となった沢山保羅との出会い、女子教育との初めての関わり、牧師活動などが取り上げられ、成瀬における女子教育と宗教の両方向が提示されている。「第三 アメリカ留学」ではアンドーバー神学校、沢山保羅の伝記出版、クラーク大学や女子カレッジなどの訪問について述べ、成瀬の関心が徐々に女子教育に向かい、研究を進めていくプロセスが明らかにされている。「第四 女子高等教育機関の設立に向かって」では、帰国後の女子教育活動、『女子教育』の刊行から、本格的な日本女子大学校創立に向けた設立運動の経緯が描かれている。特に成瀬の賛同者・援助者となった人々の顔ぶれ、かれらの成瀬への信頼・評価などを通して、改めて成瀬の人間性やその魅力が実感される。「第五 日本女子大学校における教育」では、日本女子大学校の開校時の教育、その後の展開、大学拡張運動が取り上げられ、成瀬の女子高等教育思想の実践とその特質が浮きぼりにされる。「第六 社会活動とその展開」では、女子高等教育の課題の検討を目指した「毎月会」、成瀬のジャーナリズム活動、婦一協会をめぐる活動、政府の教育関係委員会の委員としての活動など、成瀬の社会的な幅広い活動が紹介されている。「第七 晩年の思想とその死」では、インドの詩人タゴールとの交流、「軽井沢山上の生活」と題する10回の講義、成瀬の告別講演、死の前後の状況について取り上げ、成瀬の求め続けたものが提示されている。最後の「成瀬仁蔵の生涯とその魅力」は、中 先生の成瀬仁蔵論である。

本書で明らかにされた成瀬の生涯と人物像を通して、改めて成瀬の奥の深さ、広さ、大きさを実感させられるとともに、人間成瀬の魅力を読み取ることができよう。本書は今後の成瀬研究は勿論、女子高等教育研究の重要な文献となるものと思われるが、研究者に限らず、多くの方々に是非ともお薦めしたい一冊である。

（教育学科助教授）

\* 目白・西生田所蔵 請求記号281.08-Jim-231

## 100周年記念出版『日本女子大学学園事典——創立100年の軌跡』 『年表・日本女子大学の100年』の紹介

成瀬記念館

本学は昨年度 創立100周年を迎え、それに伴い様々な記念出版物を刊行した。その柱といえるものが『日本女子大学学園事典——創立100年の軌跡』『年表・日本女子大学の100年』（以下、『事典』『年表』とする）の2冊である。

まず『事典』は、その名の通り日本女子大学に関する事柄を事典形式でまとめたものである。従来、こうした学園史は何巻にもわたる分厚いものが一般的で、興味のない人にはまず読まれないことが多かった。そこで多くの人々に活用されることを目指し、新しい形態の学園史として刊行されたのがこの『事典』である。

項目は、本学の歴史に関わった人々（物故者に限る）をはじめ、各学部・学科、附属校園、建物、行事など多岐にわたり、約880項目に及んだ。執筆には、卒業生や退職された教職員を含む学園中の人々があたり、まさに学園全体で作上げた学園史といえる。

本学の学園史としては、すでに『日本女子大学校四拾年史』『学園史二』等があったが、これらを読みきくことは少々根気のいる作業であった。その点『事典』では、知りたいことをすぐ調べることができる。各項目に関する参考文献も記されているため、さらなる調査も可能である。また、興味のある分野から読むことができ、読み物としても充分楽しめるものとなっている。

さらに名誉教授 中寫邦先生による100年の通史、巻末には付表として学部・附属校園・大学院系統図、日本女子大学校発起人・賛助員名簿、本学園卒業・修了・卒園者数一覧、学内地図など様々な資料が載っており、本学を知るには大変便利な一冊である。なお、付表をのぞくほとんどの内容は、日本女子大学生涯学習総合センターのホームページにより見ることができる。

次に『年表』だが、日本女子大学の100年のあゆみを年表形式でまとめたものである。教学事項を中心とした学園事項と女性・教育関係に重点をおいた参考事項から構成され、学園事項には各々の典拠が記されている。実は創立90周年の際にも同じ体裁の年表が作られているが、今回の『年表』は単に10年分が付け加えられただけでなく、中身が大きく進化している。基本的な構成は変わらないが、さらなる調査が行なわれ、かなりの加筆・修正が行なわれた。また、新たな典拠も多く付け加えられている。

この2冊は日本女子大学の歴史を紐解くには、欠かせない資料である。学園史の大まかな流れは『年表』で、詳細は『事典』でつかんでいただければよいであろう。教職員はもちろんのこと、ぜひ学生・生徒の皆さんをはじめ、多くの方々に活用していただきたいと思う。

なお、この2冊は学内の桜楓会実業部で『事典』は2,500円（税別）、『年表』は500円（税別）で販売されている。



\* 請求記号：R377.28 - Nih (参考図書)  
377.28 - Nih (一般図書)



\* 請求記号：R377.28 - Nih (参考図書)  
377.28 - Nih (一般図書)

## 展示「わたしたちの創る日本文学の教科書」

小川 靖彦

2002年4月16日（火）から5月17日（金）まで、本学目白図書館玄関ホールにて、2001年度日本文学科専門科目「日本文学概論」の授業において、受講生たちが制作した、日本文学の教科書を展示しました。

「日本文学概論」は、主に入学したばかりの日本文学科1年次生を対象に、日本文学を学ぶための基本的視点を身に付けるとともに、日本文学研究の方法の初歩を学ぶ授業です。この授業は、受講生たちが、大学の日本文学研究が、高等学校までの「国語」よりはるかに広い領域を研究対象としていることを知り、さらに日本文学研究が、「日本」とは何か、「日本」に生きる私とは何か、そして人間とは何かを問う学問であることを体得することをめざしています。日本文学科としては、この授業を、研究への序章として特に重視しています。ちなみに、この授業には、教育職免許状や日本語教師の資格を取得するために、家政学部家政経済学科などの学生も参加しています。

2000年度・2001年度の2年間、私はこの「日本文学概論」の授業で、教員が講義するばかりでなく、受講生一人一人が主役となって、小学生・中学生・高校生、さらには外国人や社会人に、日本文学の特徴や面白さをわかりやすく伝える教科書を制作するというを試みました。人に何か伝えようとする時こそ、私たちは深くそのものについて学ぶことになるからです。それと同時に、教科書という書物の形に仕立て上げることで、“ものづくり”の大変さと楽しさを是非体験して欲しいと思ったからです（それがやがて社会に出てゆく時の力となるはずです）。

2年間の授業を終えて、この試みは予想以上の成果を上げることができました。2000年度は28点、そして2001年度は25点の個性的な教科書が完成しました。今回は2001年度の25点のうち、22点を、「1. 生きる力を学ぶ」「2. 日本文学を伝える」「3. 日本文学史を旅する」「4. 日本の美意識をさぐる」「5. 生と死を生きる」「6. 家族を見つめる」「7. 自分とは何か」「8. 女と男」「9. 古典芸能の世界に遊ぶ」のセクションに分けて展示しました。特に今年度は、人が生きるとはどういうことかを、文学のことばを通じて真摯



に考えようとする教科書が数多く見られました。また写真・年表・地図を大いに利用して、日本人の自然観や旅の意識を丁寧に示した力作もありました。あるいは、小学生が音読しながら、自分や家族について考えを深められるような、楽しくしかも奥行のある教科書もありました。どの教科書も、自分自身でテーマと作品に向かい合った実感に裏打ちされています。

私自身もこの2年間を通じて多くを学びました。日本文学研究が、決して社会とは無関係な所で行われる空虚な営みではなく、「日本」を、自分を、そして人間を探究するための重要な手懸かりであるという確信をいよいよ深めました。このように確信を深めさせたのは、受講生たちが見せた旺盛な探究心と、“ものづくり”への熱意に他ありません。大学生の学力低下が社会問題として取り上げられています。しかし、糸口さえあれば、今日の大学生たちは、思いもかけない創造力と、深い洞察力とを發揮するものです。今日の大学生たちの持つ潜在的な力の大きさを、私たちはもっと信頼して良いと思います。そして、「日本文学概論」の受講生たちは、私が考えていたよりもはるかに力強く、日本文学研究が私たちにもたらす豊かな実りを、教科書という形で示してくれたのでした。

今回も教科書の制作に当たり、三省堂出版局国語教科書編集室の編集長飛鳥勝幸氏の御助力を仰ぎました。またこの2年間の試みは、本学の先生方や図書館の皆様をはじめ、多くの方々の暖かいお力添えがあって初めてなし得たものです。この試みを見守ってくださった全ての方に、心より御礼申し上げます。

(日本文学科助教授)

## 日本女子大学図書館友の会第37回（平成14年度）総会開催される

図書館の建物の5階西南角（元英文学科研究室）に、日本女子大学図書館友の会の事務室がある。図書館友の会は、日本女子大学図書館及び成瀬記念館の充実発展に寄与することを目的としている。目白の現図書館開館1年後の1965年（昭和40）年6月23日（創立者成瀬仁蔵先生の生誕記念日）に、本学第6代学長上代タノ先生の提唱により創設された。会員は本学教職員、卒業生、在学生やその父母その他（一般）で組織され、会員数は現在502名。今年6月で37周年を迎える。



事業計画を説明される飯塚美子氏

去る5月11日（土）午後百年館504会議室において、図書館友の会第37回総会が開催された。友の会役員でもある石山常子氏の司会により午後1時に開会し、会員約45名が出席して進められた。最初に友の会会長・学長後藤祥子先生の挨拶がなされた。日頃の図書館友の会の活動について謝辞を述べられ、友の会のますますの発展を祈られた。続いて図書館長出淵敬子先生の挨拶があり、この5月1日から、目白の図書館は月曜日～金曜日は午後8時まで、目白・西生田ともに土曜日は午後5時まで、図書館の開館時間延長をしていることなどを話された。

総会の議長に林のぶ氏が選出され、議事に入った。平成13年度事業報告で、事業一般報告は阪田香公子氏、上代タノ平和文庫報告は松本晴子氏、卒業生著作調査報告は藤岡恵實子氏が報告された。事業一般報告としては、「近代女性文学を読む」（日本文学科倉田宏子教授）他6コースの講座・読書会を開催、文学散歩「山中湖文学の森」等の研修会を実施、友の会会報を年3回発行などの報告がなされた。上代タノ平和文庫報告の中で、2001年11月から2002年3月まで、図書館玄関ホールで、「上代タノ平和文庫」創設30周年記念展（大学100周年によせて）を行ったことを報告された。上代タノ平和文庫は、図書館4階にあり図書の貸出もできる。平成13年度は23万円・146冊の平和文庫の図書が選書・購入された。友の会作成の『日本女子大学卒業生著作目録』は、平成9年に改訂増補版が発行され、今回は追補Ⅳとなっている。会計担当の玉木照子氏による平成13年度決算報告の後、監事原田光枝氏の監査報告があり、決算は拍手で承認された。続いて平成14年度事業計画案および平成14年度予算案説明が、常任理事飯塚美子氏によってなされた。積立金を取り崩しての厳しい予算案であり、課題を抱えた現状を説明されたのち、事業計画案および予算案は拍手により承認された。議事の後に、田口令子情報サービス課長より、平成13年度図書館報告があった。司会者の閉会の辞があり、総会は終了となる。



ゆりの木の花（総会の日に写す）

休憩・歓談の後、三月書房代表吉川志都子氏（41回家政第2類）より講演「そそっかしい出版社」が行われた。女性一人で経営している出版社として、40年前によく取り上げられたこと。著名な作家に執筆依頼に行った時のエピソードなど、興味深いお話を伺った。この日吉川氏は、10年ほど前に発行された『三月書房 30年』の冊子を特別に増刷して持参され、出席者全員がいただいた。その中の「三月書房出版総目録」を拝見し、著名な方々の多くの図書の出版を、手がけられたことを知ることができた。午後4時会は、盛況のうちに終えた。（田口記）

## 図書館（目白）からのお知らせ

### ☆入館システムの運用を開始しています

- ・平成14年5月第2週より、入館システムの運用を開始しています。今まで図書の貸出の際には、図書館利用カードを必要としていたのと同様に、図書館に入館する際にも、図書館利用カードが必要となりますので、お忘れなくご持参ください。まだこの図書館利用カードをお持ちでない学生の方は、2階カウンターで学生証を提示して交付を受けてください。
- ・入館システムを通過する時は、利用カードのバーコードの面を左側に向け、利用カードを横向きにして差し込んでください。
- ・万一図書館利用カードをお忘れの場合は、学生証と引き換えに当日利用カードをお渡しします。

### ☆図書館（目白）の開館時間を延長しました

- ・平成14年5月1日より学部の授業がある日の開館時間は、次のとおりになりました。  
月曜日～金曜日 午前9時～午後8時  
土曜日 午前9時～午後5時
- ・図書の貸出は、閉館15分前で終了となります。
- ・月曜日～金曜日の午後7時から8時までは、2階・3階・4階の開館とし、1階（雑誌）フロアは従来どおり午後6時50分で閉室します。1階の資料を6時50分以降も閲覧したい場合は、1階カウンターで夜間貸出の手続きをして、2階フロアで午後8時まで閲覧できます。
- ・月曜日～金曜日の午後7時以降は、利用カードの新規発行&再発行、資料の取り寄せ、OPACのプリントアウトはできないなど、一部利用制限がありますのでご注意ください。
- ・通信教育課程夏期スクーリング期間や、目白祭前後など学部の授業がない日の開館時間については、従来どおりとなります。

## 図書館（西生田）からのお知らせ

### ☆入館システムの運用を開始しています

- ・平成14年5月第2週より、入館システムの運用を開始しています。図書館利用カードをお持ちでない方は、カウンターで交付を受けてください。
- ・入館システムを通過する時は、利用カードのバーコードの面を左側に向け、利用カードを横向きにして差し込んでください。

### ☆図書館（西生田）の開館時間を延長しました

- ・平成14年5月1日より学部の授業がある日の開館時間は、次のとおりになりました。  
月曜日～金曜日 午前9時10分～午後7時（従来どおり）  
土曜日 午前9時10分～午後5時
- ・図書の貸出は、閉館15分前で終了となります。
- ・土曜日の午後2時30分以降は、利用カードの発行、雑誌の取り寄せ、プリントアウトはできないなど、一部利用制限がありますのでご注意ください。カウンターへのお問い合わせは、午後2時30分までをお願いします。

編集後記 6月23日は創立者成瀬仁蔵先生の生誕記念日であり、現図書館の開館記念日でもあります。2002年3月に刊行された、中野邦著『成瀬仁蔵（人物叢書231巻）』について、真橋美智子先生より紹介していただきました。先に2001年12月日本女子大学創立百周年記念出版として、第9代学長青木生子著『いまを生きる成瀬仁蔵—女子教育のパイオニア』が刊行されています。この著書について中野邦先生が、「日本女子大学図書館友の会会報」No.100（2002.3）で紹介されています。巻頭のカットは、西生田図書館で館員としての力を鍛え始めた山村いづみさんによる。一粒の種から出た芽が、大きく成長しますように。 (田口)